

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	早稲田大学	学長名	白井 克彦	拠点番号	D 1 8	
1. 申請分野	A<生命科学> B<化学・材料科学> C<情報・電気・電子> D<人文科学> E<学際・複合・新領域>					
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	演劇の総合的研究と演劇学の確立 (Development of Research and Study Methodologies in Theatre) 副題を添えている場合は、記入して下さい(和文のみ)					
研究分野及びキーワード	<研究分野: 文 学>(芸術諸学)(演劇学)(日本文学)(英米文学)(中国文学)					
3. 専攻等名	演劇博物館・文学研究科芸術学(演劇映像)専攻					
4. 事業推進担当者	計 2 8 名					
ふりがな<ローマ字> 氏 名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)			
(拠点リーダー) TAKEMOTO MIKIO 竹本 幹夫 (58) AKIBA HIROKAZU 秋葉 裕一 (59) UCHIYAMA MIKIKO 内山 美樹子 (67) UZUKI MORIO 卯月 盛夫 (53) OKAMURO MINAKO 岡室 美奈子 (48) ODSHIMA KOSHI 小田島 恒志 (45) KOMATSU HOROSHI 小松 弘 (51) FURUIDO HIDEO 古井戸 秀夫 (55) WADA OSAMU 和田 修 (43) INUJI EIICHI 乾 英一 (57) KAI ZAWA HAJIME 貝澤 哉 (44) KUWANO TAKASHI 桑野 隆 (59) SAWADA KEIJI 澤田 敬司 (39) TAKEDA KIYOSHI 武田 潔 (52) GUNTHER ZOBEL ギンター・ツォーベル (68) HASE MASATO 長谷 正人 (47) FUJII SHINTARO 藤井 慎太郎 (35) FUYUKI HIROMI 冬木 ひろみ (51) ANTHONY MARTIN アントニー・マーティン (51) MARUMOTO TAKASHI 丸本 隆 (62) MIKAMI HIROKO 三神 弘子 (52) YAGI NAOKO 八木 斉子 (41) KATAOKA YASUKO 片岡 康子 (66) HIRABAYASHI NORIKAZU 平林 宣和 (41) ITO U HIROSHI 伊藤 洋 (73) ITO U WASAJI 伊東 正示 (54) IWAMOTO KENJI 岩本 憲児 (63) O O I KUNIO 大井 邦雄 (74)	演劇博物館・館長、文学研究科日本文学専攻・教授 演劇博物館・副館長、理工学術院・教授 文学研究科芸術学(演劇映像)専攻・教授、演劇博物館・研究員 演劇博物館・研究員、早稲田大学芸術学校・教授 文学研究科芸術学(演劇映像)専攻・教授、演劇博物館・研究員 演劇博物館・研究員、文学研究科英文学専攻・教授 文学研究科芸術学(演劇映像)専攻・教授、演劇博物館・研究員 文学研究科芸術学(演劇映像)専攻・客員教授(非常勤扱い)、演劇博物館・客員研究員 演劇博物館・研究員、文学学術院・助教授 演劇博物館・研究員、国際教養学術院・教授 演劇博物館・研究員、文学研究科ロシア文学専攻・教授 演劇博物館・研究員、教育・総合科学学術院教授 演劇博物館・研究員、法学学術院・助教授 文学研究科芸術学(演劇映像)専攻・教授、演劇博物館・研究員 演劇博物館・研究員、政経学学術院・教授 演劇博物館・研究員、文学研究科社会学専攻・教授 演劇博物館・研究員、文学学術院・助教授 演劇博物館・研究員、文学研究科英文学専攻・助教授 演劇博物館・研究員、文学研究科英文学専攻・助教授 演劇博物館・研究員、法学学術院・教授 演劇博物館・研究員、国際教養学術院・教授 演劇博物館・研究員、政治経済学術院・助教授 文学研究科芸術学(演劇映像)専攻・客員教授(非常勤扱い)、演劇博物館・客員研究員 演劇博物館・研究員、政治経済学術院・助教授 演劇博物館・前館長、文学研究科芸術学(演劇映像)専攻・教授 演劇博物館・研究員、文学学術院・客員教授 文学研究科芸術学(演劇映像)専攻・教授、演劇博物館・研究員 演劇博物館・研究員、文学研究科英文学専攻・教授	日本演劇・博士(文学) 日独比較演劇、文学修士 日本演劇・文学博士 都市計画学・工学博士 アイルランド演劇、文学修士 英米演劇、文学修士 映画史、修士(芸術学) 日本演劇、文学修士 日本演劇、文学修士 スペイン演劇、文学修士 ロシア演劇、文学修士 ロシア演劇、文学修士 オーストラリア演劇、Ph.D 映画理論・博士(言語学) 日独比較演劇・Ph.D 映画学、修士(文学) 仏語圏舞台芸術・文化政策、修士(文学) 英国演劇、文学修士 英国演劇・Ph.D ドイツ演劇、文学修士 アイルランド演劇・Ph.D 英国演劇・Ph.D 舞踊学、修士(体育学) 中国演劇史、文学修士 フランス演劇史・文学博士 劇場運営論、修士(建築工学) 映画史、文学修士 英国演劇、文学修士	研究計画全体の統括と古典演劇研究(能楽)(平成16年4月1日交替) 統括補佐と西洋演劇研究(ドイツ・日本の現代演劇) 古典演劇研究(浄瑠璃) 芸術文化環境研究(都市計画論) 演劇理論研究(アイルランド演劇) 演劇理論研究(英米日の現代演劇) アーカイブ構築研究(映画史資料) 古典演劇研究、演劇理論研究、芸術文化環境研究(歌舞伎・日本舞踊) アーカイブ構築研究(近世演劇および民俗芸能) アーカイブ構築研究(スペイン演劇) アーカイブ構築研究(ロシア演劇) 演劇理論研究(ロシア演劇) 演劇理論研究(ポストコロナル演劇と演劇の文化交流) アーカイブ構築研究(映画) 演劇理論研究(ドイツおよび日本の全時代にわたる比較演劇) アーカイブ構築研究(映画) 演劇理論研究、芸術文環境研究(フランス語圏の舞台芸術・文化政策) アーカイブ構築研究、演劇理論研究(エリザベス朝演劇を中心とする英国演劇) アーカイブ構築研究、演劇理論研究(エリザベス朝演劇を中心とする英国演劇) 演劇理論研究(オペラ) 演劇理論研究(アイルランド演劇) 演劇理論研究(イギリスを中心とする英語圏演劇) 演劇理論研究(舞踊学)(平成15年4月1日追加) 演劇理論研究(京劇等中国古典・近代演劇)(平成15年4月1日追加) 研究の総合統括(平成14~15年度)・演劇理論研究(フランス古典演劇)(平成16年3月31日辞退) 芸術文化環境論研究(劇場運営)(平成17年10月20日辞退) アーカイブ構築研究(映画)(平成18年3月31日辞退) アーカイブ構築研究(英国演劇)(平成15年3月31日辞退)			
5. 交付経費(単位:千円)千円未満は切り捨てる ():間接経費						
年 度(平成)	1 4	1 5	1 6	1 7	1 8	合 計
交付金額(千円)	85,000	84,000	81,100	126,000 (12,600)	116,430 (11,643)	492,530

6. 拠点形成の目的

【将来構想との関係と本拠点の特色】

本学には、坪内逍遙以来の比較演劇研究の伝統があり、東洋における唯一の本格的・総合的な演劇研究機関としての演劇博物館があって、本館研究員を中核とする学術フロンティアなど先進的研究事業の実績を重ねてきた。それを可能にしたのは本館の所蔵する膨大な蔵書群である。とくに本館の貴重古典籍は総計5万点以上に及び、学界に多くの貴重な学術資料を提供し続けてきた。一般和書・洋書に至ってはそれに数倍する。その分野は洋の内外を問わず、また古典と現代を問わず、多岐にわたっている。

また文学研究科芸術学（演劇映像）専攻は、学部の演劇映像専修と一体となって、文化勲章を受章するような第一級の演劇人、文化功労者に指定された複数の演劇研究者を輩出してきた。現在、海外の主要大学で日本古典演劇を講じている人材は、多くが本専攻の出身である。本専攻には全世界で学界をリードするような演劇研究者が多数在職し、演劇研究を志す学生や海外からの留学生の数も拡大しつつある。

この両組織を有機的に組み合わせ、演劇学に関する総合的な教育研究拠点を形成すれば、必ずや世界の演劇研究をリードする先進的な研究センターとなるであろう。

【背景となる研究分野の世界的状況と拠点形成の目的・必要性】

「演劇は世界の共通言語」と言われるように、いかなる地域においても演劇は存在し、演劇の研究者は少なくないにもかかわらず、世界共通の価値基準を備えた、総体としての「演劇学」という学問分野は存在しない。すなわち演劇の研究には、その歴史や作品テキストを研究する実証主義的な学問と、舞台演出や舞台での上演そのものを研究内容とする実技研究の領域とがあるが、それぞれが独立的に存在して、相互の交流はあまりないのが現状である。従って理論と実演の両者をつなぐような、演劇技法の解析的研究などは、演劇の本質と関わるきわめて重要なテーマであるにもかかわらず、世界的規模で進展しているとはいえない。

しかしながら本学においては、浄瑠璃・歌舞伎の復元的研究は四半世紀以上前から故郡司正勝教授の後を承けた内山美樹子教授・古井戸秀夫教授により試みられ、多くの成果を上げてきた。最近ではこれに竹本幹夫教授による能テキストの系統研究と能楽技法の復元的研究が加わり、たんなる古曲の商業的再演ではない、数百年以前の上演形態を復活させる野心的な試みも行

われつつある。また演劇理論研究においても、例えば三神弘子教授や岡村美奈子教授によるアイランド演劇研究は、世界的な影響力を持つまでに成長した。このような学問的伝統を踏まえつつ、演出・演技の復元的研究に演劇理論研究を関わらせた、新しい学問分野としての「演劇学」を確立するのが、拠点形成の目的である。

「演劇研究センター」は、別記7に述べる4系列のコースを開設し、そこにおいて複数の研究者が参加学生をチームティーチング方式で指導する。学内の演劇研究者だけで日本及びヨーロッパ演劇についてはほぼ網羅することが可能であるが、これまでの国際交流の実績を踏まえ、アジアも含めた海外の著名な研究者を初め、学外の研究者の参加も呼びかけたい。

またそこに集う学生は、文学研究科芸術学（演劇映像）専攻の博士後期課程在籍学生9名（1学年の基礎数）を中核とするが、博士後期課程に在籍する演劇研究を志す学生であれば、早稲田大学大学院に在籍すると否とを問わず、海外の学生も含め、誰でも応募出来るものにしたい。総計で1学年30名前後の受入を想定している。いくなれば大学院博士後期課程におけるオープン教育という形態を取り、このような自由な研究環境の中から、世界的に活躍できる人材を育成し、中核的拠点たらしめようという発想である。

また演劇博物館所蔵の演劇関係諸資料（典籍資料・博物資料）を拡充して教育研究と直結したアーカイブを構築する。これらの構想の基盤として、教育システムとしての4コースに所属する形で、研究機構内に複数の研究プロジェクトを創始し、個別の研究テーマを深めていくこととしたい。

将来的には大学内の関連諸施設や関連箇所、すなわちいくつかの大学所有の劇場やスタジオ、早稲田大学芸術学校や新たに発足する大学院のスタッフ、大学の海外拠点とも連携した、新しい概念の教育研究の場を構想し、海外の諸大学・研究機関との提携関係をさらに発展させて、国際的な教育研究事業を展開したい。

【研究成果と波及効果】

演劇学は、歴史研究から映像研究までも包摂する、多様で大きな可能性を秘めた領域である。これらが独立した学問として確立すれば、総合芸術であるという特性のゆえに、関連諸分野との連携を前提とする新しい学問研究のモデルを形成することになる。また芸術や文学は、研究については世界的評価が与えられにくい分野であったが、演劇学の確立はそこに世界標準の価値基準をもたらすことを可能にしよう。

7. 研究実施計画 研究拠点形成実施計画

【演劇研究センターの4分野】

「演劇研究センター」は、4分野のコースを中心として形成される。その内訳は、アーカイブ構築研究・演劇理論研究・古典演劇研究・芸術文化環境研究である。アーカイブ構築研究においては、演劇関連資料の調査・収集を行い、映像データベースの研究を合わせ行う。古典演劇研究においては、日本の伝統演劇を中心に作品の分析とその復元研究を行う。演劇理論研究においては、世界の演劇理論の研究を通じて演劇学の概念を確立する。芸術文化環境研究においては、演劇と社会との関わりに視点を置き、地域環境に深い理解を有する劇場・ホール運営の専門家養成を行う。

これらの講座は、演劇博物館研究員と文学研究科芸術学（演劇映像）専攻とを中核とするスタッフにより運営する。また1年ごとに学外・海外の世界的権威を客員教授として招聘し、講座スタッフとして参画してもらう。必ずしも演劇研究者のみならず、異分野の人材の参加も念頭に置きたい。

【4分野の内訳と管理運営】

アーカイブ構築学で目指すのは、国内外を問わず、演劇資料を積極的に調査・収集することである。そのためには資料そのものを購入することはもとより、全世界に散在する演劇資料・古典籍の撮影による収集も念頭に置かねばなるまい。それらをデータベース化する一方で、資料の保存・活用方法についても研究を進めたい。収集する資料は膨大なものになるはずであるが、なるべく早期に解題付き目録を刊行し、同時に広く公開して一般の利用に供したい。

演劇理論研究では、海外の演劇研究者・実演者との交流が基本となる。すなわち海外の研究者との共同研究を前提として、国別の演劇理論の実態を探り、それらを比較検討することにより、世界的な規模での演劇理論の共通性を抽出することを目指す。本学の専任スタッフに加え、著名な内外の研究者を招聘することにより、研究を進めたい。ヨーロッパ演劇の場合は、近現代のヨーロッパ演劇が世界に与えた影響と、逆に世界から受けた影響とを、アジアとの文化の相互交流という視点から確認したい。またアジア演劇については、演劇の形成過程と近代劇の成立とについて、考察を深めたい。また民間祭儀が演劇をはじめとする諸芸能と深い関わりを持つことが、アジア演劇については多くあるので、そうした祭儀と芸能との関係についても、

考察を深めたい。

古典演劇研究は、基本的には日本演劇に焦点を絞り、作品の定本となるべき本文の校訂を主体とする実証的な文献研究になるが、同時に作品の古態を復元する復元研究の可能性も探りたい。古典演劇と言っても、能と浄瑠璃と歌舞伎では、置かれた環境も相違し、歴史も異なる。例えば能の場合は、様式研究を第一歩として、最終的には各種の演技実例を映像化することにより、演技様式のあり方を探ることが望ましい。ただし映像研究のようにそれ自体で膨大な費用が見込まれるプロジェクトは、研究としての将来性を認識した段階で、本拠点から科学研究費を申請するなどして、さらに展開させることを前提としたい。

芸術文化環境研究は、新しい分野である。全国には約3000の公共ホールがある。そこでは、演劇や音楽・舞踊などの芸術作品が提供されるだけではなく、さまざまなワークショップやエデュケイショナル・プログラム、アウトリーチ・プログラムなど、地域の学校や文化施設、社会施設と提携する開かれたプログラムが展開されつつある。そのような劇場・ホール運営にも、それに関わる専門職が確立されねばならない。このような視点から、早稲田大学では、第二文学部表現・芸術系専修を中心に、全国の劇場・ホールと提携して、インターンシップ型の実習を取り込んだ、専門家養成のコースを設置した。それを発展させて、大学院博士課程までの、より高度な研究教育システムを確立する。そのためには、イギリス型、ドイツ型、フランス型、アメリカ型劇場運営を調査研究し、日本型の劇場運営のモデルを構築し、専門職を養成するためのプログラムを策定することが必要である。

【研究計画の管理運営】

上記の計画のために、講座・研究プロジェクト管理のための事務機構が必要になろう。また資料の収集、資料の有効利用を促進するための収蔵・閲覧・展示スペースの確保、資料に近接した教室の確保、情報機器メンテナンスと情報化のための人員の雇用、閲覧による貴重書の損耗に備えるための補修設備と人材の確保、国際的な研究協力のための海外研究拠点の確保などが、同じく必要になろう。

このようにして集積されるであろう研究成果を公開するための方策として、国際研究集会の恒常的開催、収集した研究情報・演劇情報のデータベース化とインターネットを通じての複数言語による情報発信、公正な第三者による審査機関を備えた研究紀要の発行などを行う。

8. 教育実施計画

【学生の受入について】

ここに集う学生は、本属の研究機関からこの「演劇研究センター」に、いわば留学するような形になる。本学大学院後期課程に在籍して演劇研究に志す者の他、他大学大学院後期課程に在学する学生や、海外の留学生で参加を希望する優秀な学生も受け入れたい。演劇研究センターでの研究活動に参加を希望する学生は、一年間ごとで漸進的な成果の実現が可能な研究計画書を提出し、審査を受ける。審査に合格して希望するコースに登録した後は、その分野に存在する任意の研究プロジェクトを選択し、そのスタッフの指導のもと、年間研究計画を立て、それに従って研究を行う。参加年数は自由であるが、本属研究機関への課程博士論文提出可能期間内とする。毎年、博士論文の一部となるような学術的研究成果を発表することを義務づける。成果が出せなかった場合は、自動的に研究計画の再提出・再審査となる。計画書を提出しない場合は、それ以上のプロジェクト参加を認めない。最終的には本属研究機関への学位論文提出を以て、研究指導が完了する。

【コースにおける研究指導とプロジェクト研究】

各コースは、原則として複数のスタッフによる研究指導のほか、各スタッフが中心となって個別の研究プロジェクトを立ち上げ、学生はそこに参加することで自らの研究を進めることとする。こうしたプロジェクトでは、教員スタッフの申請による科学研究費などの外部資金を導入して、さらに大規模な研究を行うことも可能とする。また全ての学生を対象に優秀な者には何らかの研究支援を行うこととし、本センターから外国に留学する学生にも同じく予算の交付を考えたい。とくに本センターにおいて日本演劇を研究する学生には、半年間の海外留学を奨励する。外国の研究者の日本演劇研究は最近急速に進展しつつあるが、彼らと研究交流するためには、日本演劇研究を志す学生も在外経験を積むべきだからである。

またこれら本学専任教員以外にも、すぐれた研究者を一年以内の短期間、国内・海外から招請し、客員教員の待遇で研究の推進・指導に協力を仰ぐ予定である。さらにデータベース関連の管理運営、学生への日常的なケア、博物資料や貴重書の維持管理のために、インストラクターを雇用したい。研究プロジェクト全体を管理するための事務機構も整備する必要がある。

【各コースの全体像】

全体の教育計画は、下記のようなコースとなる。下線

を引いたのは中核となる 10 名である。以下の 4 つの分野は相互に交流し合うことにより、演劇の総合研究が可能となる。所属学生には自分の分野のみならず、他分野の研究集会にも参加することを奨励したい。

【アーカイブ構築研究分野】

演劇資料の調査・収集と、そのための専門教育、収集資料の分類整理を目指す。

演劇アーカイブ学研究コース（日本・東洋）和田〔演劇資料・古典籍などの演劇資源学研究と資料収集の実際、資源修復論など〕

演劇アーカイブ学研究コース（西洋）貝澤・乾・マチ・冬木〔ヨーロッパの演劇資料収集と解題作成など〕

演劇アーカイブ学研究コース（映画）小松・岩本・武田・長谷〔映像資料の収集と紹介・研究など〕

【古典演劇研究分野】

能・狂言・浄瑠璃・歌舞伎を中心とする古典演劇作品を成立当時の姿に復元することを目指す。

古典演劇復元研究コース（能・狂言）竹本〔謡本のテキスト研究と作品分析〕

古典演劇復元研究コース（浄瑠璃）内山〔浄瑠璃正本のテキスト研究と作品分析〕

古典演劇復元研究コース（歌舞伎）古井戸〔歌舞伎台本のテキスト研究と作品分析〕

【演劇理論研究分野】

ヨーロッパ・アジア・アメリカ・オセアニア・日本の現代劇に関する国際共同研究を目指す。

演劇理論研究コース（西洋演劇）大井・岡室・小田島・澤田・藤井・三神・八木〔英米演劇（アイルランドを含む）の理論研究〕

演劇理論研究コース（西洋演劇）伊藤・秋葉・桑野・丸本・ツォーベル〔ヨーロッパ諸国演劇の理論研究と東西比較演劇〕

演劇理論研究コース（東洋演劇）（平林）（中国・韓国の演劇の理論研究）

【芸術文化環境研究分野】

劇場の運営や公演企画を専門的に研究するための新分野の確立を目指す。

芸術文化環境研究コース（劇場ホール運営）伊東〔劇場ホール運営の専門家養成〕

芸術文化環境研究コース（劇場計画）卯月〔地域と劇場をめぐる都市計画論〕

芸術文化環境研究コース（文化政策）（藤井）〔演劇をめぐる各国文化政策の比較〕

9. 研究教育拠点形成活動実績

目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

本拠点においては、ほぼ想定通りの成果を上げた。すなわち大学の将来計画の中で、芸術学分野を中核とする人文系拠点の形成という方向に、演劇学という具体的な目標を提示することが出来た。本学の人文系学問が、過去五年を通じて演劇学を中心に展開したことは、本拠点に対する中間評価の結果を見ても明らかであり、それはまた大学が当初掲げた戦略目標を人文学分野において十二分に達成したことを示すものといえる。本学が演劇学において国内で一頭地を抜く拠点形成に成功したことはいまや疑いのないところである。本学の人文科学研究は、今後も演劇学を中心として展開することになるであろう。また本学文学学術院の抜本的構造改革の中で、大学院教育における演劇分野の充実がいっそうはかれることになるであろう。

このような学内的な位置は、そのまま本学の国際的評価とも一体である。すなわち世界の演劇研究拠点との数々の研究協力関係、学術提携関係は、過去五年間を通じて飛躍的に拡大した。そのことにより、世界中の演劇研究者が本学を訪問することになった。通算37回にも及ぶ国際研究集会は、アジア初の国際サミュエルベケットシンポジウムのような世界的な権威が参集する一大学会をも内包しており、国際的に著名な研究者が、数多く本拠点において学術講演や研究発表を行って来ている。こうした国際的学術イベントを中心に、通算558回の研究会を催したが、その中心を担ったのは、公募によって参集した特別研究生と呼ばれる大学院博士後期課程の若手研究者達であり、30名近い事業推進担当者、50名を超える研究協力者の指導の下で、通算100名以上の特別研究生が研鑽を重ねた。その半数は本学以外の出身であり、海外からの留学生も少なくない。そこには、西洋演劇研究を志す学生が西欧から留学してきた例すら含むのである。その中で学位取得者の数は必ずしも多くはなかったが、高等研究機関への就職者の割合は非常に高い。また特別研究生の大多数を占める博士課程在学生の多くが、今後一両年以内に学位を取得する見込みである。

研究面でも各分野に数々の知見が得られ、国際的な新発見もあった。アーカイブ構築研究、古典演劇研究、演劇理論研究、芸術文化環境研究の4分野は、演劇アーカイブ・映像アーカイブ、能・人形浄瑠璃文楽・歌舞伎、東洋演劇理論・西洋演劇理論・舞踊理論、劇場

運営・文化政策の細目分野を派生させたが、それらは遠心的に拡散することなく、相互に協力し合いながら求心的な研究拠点形成の構築に向かった。例えば、能や歌舞伎の古典演劇研究が、西洋演劇理論研究・東洋演劇理論研究と共同で、劇場形成論の準備研究を行うなどの事業が、このような求心力を生んだのである。

さらに50万件的の資料をデジタル化して公開し、年間300万件的のアクセス数を誇るデータベース構築を行った。また季刊のニューズレター、年刊の紀要・報告書の他、論文集を含む多数の単行本を刊行したことも特筆に値する。このほか、古典演劇の復元研究と実験公演も、フランス古典演劇・浄瑠璃・歌舞伎舞踊劇・能楽の分野でそれぞれ複数の成果を上げた。

これら演劇研究を総合的に推進する努力が、演劇学という分野を活性化し、優秀な人材が本拠点に集う結果を招来した。学界のみならず、演劇実演の現場との連携も可能となり、そうした連携事業の中で、若手研究者が演劇とは何かを実地に直接体験するという貴重な機会も生まれた。いまや演劇学は、文学研究や一般的芸術諸学として一括される教養的研究とは別種の、独立した学問分野に成長したのであり、テキスト研究・歴史研究と音楽学や身体論とを融合した、固有の学として確立されつつある。

こうした学問体系を支えるのが事業推進担当者会議におけるチームワークである。今回の拠点形成事業の最大の成果が、実はこの点にある。人文科学はこれまできわめて個人的で孤立性の高い学問分野であった。共同研究といってもたんなる作業分担以上の有機的研究は出来なかった。それは一つには各研究者の専門意識の高さが原因であったが、今ひとつには共同研究を構想するだけの十二分な予算が与えられなかったことによる。それはまたそうした予算を縦横に駆使できるだけの研究構想の不在も大きく原因していたことは疑いない。

しかるに本拠点においては、従来の人文科学においてはきわめて困難と考えられがちであった共同研究を、真の意味で可能にしたのであり、交付された予算にふさわしい研究・教育成果を上げたのである。今回の21世紀COE事業のような、広汎かつ高額の予算交付は、近代国家成立以降の、わが国人文科学の歴史にとって、実に画期的なことであったが、わが拠点はそれに十二分に応える成果を上げることが出来たと自負している。

またそうした大拠点を支えるだけの組織整備も行い、予算・人事の透明性と適正運営を実現したことも、特筆しておきたい。

2)人材育成面での成果と拠点形成への寄与

5年間通算で、演劇研究に志す144名の若手研究者（ポスドク・博士後期課程在学学生）を受け入れ、そのうち76名が他大学学生であった。また世界14カ国26名の留学生が特別研究生に採用された。通算8回の学位論文成果報告会を行い、全9巻の紀要に113本の査読論文が掲載された。彼らの中から13名を客員研究助手として雇用し、7件の個人研究プロジェクトに予算的支援を行い、8名の研究助手を原則半年間、海外に研修のために派遣した。このほか、西洋演劇理論研究に志す特別研究生には原語によるゼミを実施した。また各研究イベントへの積極的参加を勧めた。5年間通算で学位取得者は16名と少なかったが、それまではゼロ名であったし、高等教育研究機関への専任としての就職者が13名に達したのは、極めて高い割合といえる。なお学位未取得の特別研究生の多くが、この一両年の内に学位申請を行う見込みである。

3)研究活動面での新たな分野の創成と、学術的知見等

年刊の紀要9冊に総計221件の論文を掲載し、その他3冊の報告書、12冊の論文集を含む単行本を拠点より刊行した。演劇研究の分野でこれほどの成果発表が行われた例はなく、学術成果の量的な側面では、演劇学という学問分野の確立にきわめて有効であった。

また事業推進担当者の小松弘教授は無声映画の名監督スタンバーグの幻の名作とされていた『女の一生』のフィルム断片(約3分)を発見、考証して世界的なセンセーションを巻き起こした。

拠点代表の竹本幹夫教授は、世阿弥能楽論諸本中の最善本で、原本が関東大震災で焼失した松廼舎文庫本の内、『三道』のきわめて精確な影写本を発見・紹介した。現在、世阿弥能楽論の多くが、底本を松廼舎文庫本の活字翻刻である吉田東伍校訂『能楽古典世阿弥十六部集』を用いている。この発見は、これまでの世阿弥能楽論校訂のあり方に変更を迫るものとなった。

事業推進担当者の岡室美奈子教授は、平成18年に国際サミュエルベケットシンポジウムを主宰した。これは、ベケット生誕100年を記念して世界各国で行なわれた学会の中でも最

大級の本格的な国際学会で、もちろんアジアでは最初のベケット国際学会である。わが国がベケット研究で世界に伍していることを、ノーベル賞作家のJ・M・クッツェー氏はじめ、海外約20ヶ国から集った研究者たちに強く印象づけた。

これらの他、フランスから17世紀古典劇を実験的に復元している研究者・俳優を招聘して実験公演を行い(伊藤洋前拠点代表)、ポール・クロードル作の舞踊劇『女と影』を歌舞伎舞踊劇として復元し(古井戸秀夫事業推進担当者)、複数の浄瑠璃廃曲を復元し(内山美樹子事業推進担当者)、さらに能 卒都婆小町 の室町末期演出の復元公演の記録映像を収録し、奈良興福寺で幕末まで上演されていた古態の翁猿楽を復元する(竹本幹夫拠点代表)など、日本古典演劇に関する数々の本格的な実験事業も行った。民俗芸能に関しても、佐渡文弥人形劇の実演などの実験公演を行った(和田修事業推進担当者)。

4)事業推進担当者相互の有機的連携

各事業推進担当者はそれぞれ複数の研究プロジェクトを率いたが、例えば『女と影』の復元については、歌舞伎研究部会のみならず、西洋演劇理論・舞踊研究部会のメンバーや、芸術文化環境研究コースのメンバーが協力し、作品自体の復元のみならず、舞台美術に至るまでも独力で復元した。またアーカイブ構築研究コース映像部会と西洋演劇理論研究部会との共同で中国・ヨーロッパの調査旅行を行い、東洋演劇理論研究部会と能楽研究部会とで中国の舞台遺構の調査を行い、さらに日本古典演劇研究コースの全体と演劇理論研究コースの全体とで、日・中・欧の比較演劇史研究のための準備研究を行うなど、各研究分野が有機的に連携しつつ研究を推進した。

5)国際競争力ある大学づくりへの貢献度

早稲田大学はもともと演劇の世界に多数のすぐれた人材を輩出しており、そうした演劇創造の現場との協力の下に、演劇研究を発展させてきたという歴史を持つ。このたびの拠点形成事業を通じて、これまでの学問伝統はさらに確固たるものとなり、演劇学は本学人文科学分野を代表するものとなった。チェコ共和国のクラウス大統領への名誉学位授与や、チェコセンタ

ーの支援によるチェコのバロック舞台調査・チェコ映画シンポジウム、フランス大使館の支援による演劇人招聘、ノルウェー大使館の支援によるイブセンシンポジウム、リトアニア大使館の支援によるリトアニア映画シンポジウムなど、数々の文化事業も、本拠点と深く関わりつつ進行したものであり、大学の国際化に大きな役割を果たすものであった。

6) 国内外に向けた情報発信

本拠点の紀要には原語による論文も掲載されており、またすべての論考に英文要約を付載して、世界の演劇研究拠点に寄贈している。また過去5年間で50万件のデータをデータベースに追加更新し、これに対していまや年間300万件のアクセスがあるまでになった。海外からのアクセスも少なくない。

37回の国際研究集会を通じて世界各国の演劇研究の権威との交流が行われるようになり、個別の研究交流が頻繁に行われてもいる。

なお拠点の日常的な活動については、4カ国語対応のホームページで紹介しており、また中間評価結果を踏まえて、通算6号となったニューズレターの発行を行った。

7) 拠点形成費等補助金の使途について(拠点形成のため効果的に使用されたか)

予算の使用に当たっては、毎年年度末に翌年度の活動計画書を各コースより提出してもらい、そこに付属する予算書と共に、予算委員会において審議して、予算配分を決定した。人事に関わる予算請求に対しては、別に人事委員会に案件を回送し、人事委員会での審議を経た後に、予算配分を行った。また夏休み終了直前、冬休み開始直前、および春休み開始直前に定期的な予算執行状況の監査を予算委員会において行い、予算超過や執行遅滞に関して注意を行い、場合によって補正予算を組んで再配分を行うなどの措置を講じた。これらにより、予算の効果的使用が確実となり、適正な予算執行が可能となった。

今後の展望

本拠点では、平成18年度末に21世紀COE事業が一応完了した時点で、86名の特別研究生が在籍していた。その多くが数年の内に学位取得の予定である。ただしそのためには今後とも継続的な教育事業が必要である

ので、そのための外部資金導入が不可欠となる。現在、演劇博物館では、私立大学高度化推進事業・学術フロンティア「日亜・日欧比較演劇総合研究プロジェクト」の採択を受け、また科学研究費の研究成果公開促進費・データベースの採択を受けてもいる。これらは純然たる研究事業であるため、演劇学の将来を担うための若手研究者の育成には、グローバルCOE事業などへの申請が不可欠である。

現在わが国には、人文科学研究拠点への大規模研究支援を行う事業は、文部科学省関連事業以外には存在しない。そもそもいかなる学問研究でも、社会的な何らかの支援がない限り、継続は不可能である。本拠点は当面、公的な助成に頼らざるを得ない状況にある。将来的には、企業からの支援をも期待しているが、まずは人文科学分野で顕著な社会貢献の実を挙げることが先決で、そのためには公的助成による研究拠点継続以外の進路はないと確信する。

その他(世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度)

学内においては、本拠点は人文科学分野では最大の研究拠点となった。学部・大学院研究科そのものを除いては、国際研究集会の開催数、研究事業の総数、研究交流の多様さでも、学内随一の規模を誇る。社会的な貢献度、学問成果の発表件数・評価においても、人文系拠点で学内に本拠点に拮抗する組織は存在しない。

このために学外の演劇の現場から、研究的な側面を持つ企画についての参画をしばしば求められるようになっており、また館蔵資料の利用に関する問い合わせも倍加した。こうしたことは多くが本拠点の社会貢献の一部でもあるので、基本的には無償協力する方向で対応している。さらに海外からの留学希望が年間複数あり、これも極力受諾する方向で対応している。フェローシップ応募のための推薦状の依頼も少なくない。また海外から来日する演劇人・演劇研究者の多くが、本拠点を訪問することが慣わしとなりつつある。海外からの演劇関連の式典への参加要請などもあるが、教育・研究面での何らかの実質を伴わない場合は、原則として対応しない。世界的な視点で見ても、本拠点はアジア地域で最大の演劇研究拠点となった。

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	早稲田大学	拠点番号	D18
拠点のプログラム名称	演劇の総合的研究と演劇学の確立		
1. 研究活動実績			
この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】			
・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕 ・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの 著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入 波下線（ ）：拠点からコピーが提出されている論文 下線（ ）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生			
竹本幹夫 論文：「『拾玉得花』の再検討-序破急説その他について-」『能と狂言』4(能楽学会紀要)、PP.108～114、2006年			
竹本幹夫 論文：「丹後物狂の形成」『國文學』50巻6号(學燈社)、PP.120～128、2005年			
竹本幹夫 論文：「吉田文庫蔵新出本『三道』について」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学21世紀COEプログラム演劇の総合的研究と演劇学の確立)、PP.1～7、2004年			
竹本幹夫 論文：「能『女郎花』第4段の謡について」『The Noh Ominameshi-A Flower Viewed from Many Directions-/Cornell University East Asia Program/Mae J. Smethurst』、PP.243～256、2003年			
竹本幹夫 論文：「吉田文庫の世阿弥能楽論資料紹介」『文学』7/8月号、PP.199～206、2003年			
秋葉裕一 論文：「『戦後60年』の戦争もの、そしてプレヒト劇」『人文社会科学研究』46号(早稲田大学理工学部複合領域人文社会科学研究会)、PP.13～30、2006年			
秋葉裕一 論文：「ベルトルト・プレヒトの『傷ついたソクラテス』」『緑陰のもとで』(短編小説の会)、PP.213～232、2004年			
秋葉裕一 論文：「ベルトルト・プレヒトの短編小説『実験』について」『ドイツ・文学の描くその紋様』(栗田光行先生退職記念論集編集委員会)、PP.1～4、2002年			
内山美樹子 論文：「『酒呑童子枕言葉 鬼が城対面の段』2005年、奏演と研究」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学21世紀COEプログラム演劇の総合的研究と演劇学の確立)、PP.101～115、2006年			
内山美樹子 論文：「『義経千本桜』の作者・構想と上演方法 - 2003年、2004年現在における - 」『近松研究所紀要』15号(園田学園女子大学近松研究所)、PP.3～20、2005年			
内山美樹子・桜井弘編、杉山其日庵著『浄瑠璃素人講釈 上・下』(岩波書店)、各PP.342、2004年			
内山美樹子 論文：「近松生誕三五〇年記念の文楽上演」『江戸文学』30号(ぺりかん社)、PP.176～181、2004年			
内山美樹子 論文：「『狭夜衣鴛鴦剣翹』の上演」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学21世紀COEプログラム演劇の総合的研究と演劇学の確立)、PP.77～85、2003年			
岡室美奈子・三神弘子・八木育子編著、Noreen Doody・Declan Kiberd・Cathy Leeney・Joseph Long・Christopher Murray・Anthony Roche・坂内太 単行本：『Ireland on Stage: Beckett and after』Carysfort Press、PP.186、2007年			
岡室美奈子 論文：“Words and Music, ...but the clouds..., and Yeats's The Tower” Beckett at 100: Revolving It All. Ed. Linda Ben-Zvi and Angela Moorjani, New York: Oxford University Press, 2007年			
岡室美奈子 論文：“Joycean Narrative in Beckett's Ohio Impromptu: Who Veils the Name of the dear Person?”『演劇研究センター紀要』(早稲田大学21世紀COEプログラム演劇の総合的研究と演劇学の確立)、PP.131～139、2007年			
岡室美奈子編、内野儀、宇野邦一、大橋洋一、桑野隆、谷川道子 単行本：『知の劇場、演劇の知』(ぺりかん社)、PP.268、2005年			
岡室美奈子 論文：“Alchemical Dances in Beckett and Yeats” Samuel Beckett Today/ Aujourd'hui SB14, PP.87-103, Amsterdam: Rodopi, 2004年			
小松弘 論文：「The Foundation of Modernism: Japanese Cinema in the Year 1927」“Film History”(John Libbey Publishing)、PP.363～375、2005年			
小松弘 論文：「モダニズムの成立」『紀要』50(早稲田大学大学院文学研究科)、PP.25～42、2005年			
小松弘 論文：「映画—その歴史と特徴」『ノルウェーの社会』(早稲田大学出版部)、PP.122～136、2004年			
小松弘 論文：「『ミカエル』- 美術と映画空間のあいだ - 」『紀要』49(早稲田大学大学院文学研究科)、PP.53～67、2004年			
小松弘 論文：「ジョゼフ・フォン・スタンバーグ『女の一生』—断片—」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学21世紀COEプログラム演劇の総合的研究と演劇学の確立)、PP.1～6、2004年			
武田潔 単行本：「明るい鏡-ルネ・クレールの逆説」(早稲田大学出版部)、PP.376、2006年			
武田潔 論文：「映ることと見ること-黒澤映画における反映と表象の主題系」『岩本憲児編「黒澤明をめぐる12人の狂詩曲」』(早稲田大学出版部)、PP.48～67、2004年			
平林宣和・瀬戸宏編、顧文勲・飯塚容「文明戯研究文献目録」(好文出版)、PP.56、2007年			
平林宣和 論文：「革命現代京劇の英雄人物造型に関する一考察 - 京舞体三結合を中心に - 」『中国都市芸能研究			

第四輯』、PP.5～20、2005年

平林宣和 論文：「文革期におけるスタニスラフスキーシステム批判初探 - 革命現代京劇と「人間」のいない舞台」『中国都市芸能研究 第三輯』(中国都市芸能研究会)、PP.33～42、2004年

平林宣和 論文：「国劇の黄昏 - 中華文化と本土文化の狭間で」『広島経済大学研究論集第25巻・3号』(広島経済大学)、PP.49～60、2002年

平林宣和 論文：「台湾における国劇概念 - 国民党遷台から1960年代まで - 」『中国都市芸能研究第一輯』(中国都市芸能研究会)、PP.39～46、2002年

藤井慎太郎・佐和田敬司・冬木ひろみ・丸本隆・八木斉子編著、秋葉裕一、石川理絵子、一ノ瀬和夫、伊藤洋、稲田奈緒美、乾英一、ベアーテ・ヴォンデ、大崎さやの、小田島恒志、小田中章浩、川島京子、川島健、國吉和子、小島康男、坂本麻衣、笹川慶子、嶋内博愛、田草川みづき、竹本幹夫、ギュンター・ツォーベル、外岡尚美、中島裕昭、長島確、永田靖、西堂行人、萩原健、長谷川悦朗、東晴美、平田栄一郎、間瀬幸江、宮崎刀史紀、本山哲人、森田まり子、森佳子、八木雅子、山形治江、横山義志、吉田寛 単行本『演劇学のキーワード』(ペリかん社)、PP.352、2007年

藤井慎太郎 論文：「芸術、文化、民主主義 文化的平等とフランスの舞台芸術政策」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学 21世紀COEプログラム演劇の総合的研究と演劇学の確立)、PP.271～286、2007年

藤井慎太郎 論文：「日本演劇、フランス演劇、その隔たり、その魅力 日仏演劇交流の20世紀」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学 21世紀COEプログラム演劇の総合的研究と演劇学の確立)、PP.1～8、2005年

藤井慎太郎 論文：「『屏風』、あるいは裏切りという名のゲーム」『舞台芸術』7号(京都造形芸術大学)、PP.252～262、2004年

丸本隆編著、冬木ひろみ、八木斉子、森佳子、弓削尚子、小島康男、清水英夫、福中冬子、神尾達之、中川さつき、長谷川悦朗、関根裕子 単行本：「初期オペラの研究—総合舞台芸術への学際的アプローチ」(彩流社)、PP.284、2005年

丸本隆編著、伊藤直子、倉敷武、中野京子、長谷川悦朗、濱野智子、松尾直美 単行本：「オペラの18世紀 - パロックからモーツァルトへ」PP.358、(彩流社)、2003年

丸本隆 論文「日独の舞台に笑いはあるか？—二つの「遅れてきた国」を比較する」『ドイツの笑い・日本の笑い—東西の舞台を比較する』、(松本工房)、PP.141～217、2003年

丸本隆 論文：「ドイツの演劇制度」『現代ドイツのパフォーミングアーツ』(三元社)、PP.21～23、2006年

古井戸秀夫編、河竹登志夫監修：「歌舞伎登場人物事典」(白水社)、PP.1105、2006年

古井戸秀夫 論文：「歌舞伎の春」『國文學』52巻1号(學燈社)、PP.26～31、2007年

小田島恒志 論文：「上演翻訳におけるジェンダー意識」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学 21世紀COEプログラム演劇の総合的研究と演劇学の確立)、PP.375～382、2003年

三神弘子 論文：「'The saga will go on': Story as History in Bailegangaire」『Ireland on Stage: Beckett and After』(CARYSFORT PRESS)、PP.135～151、2007年

三神弘子 論文：「Not 'Lost in Translation': Martin McDonagh in Japan」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学 21世紀COEプログラム演劇の総合的研究と演劇学の確立)、PP.21～25、2006年

三神弘子 論文：「ヒーローの「ステーション島」とダーク湖の贖罪巡礼」『エール』25(日本アイルランド協会)PP.10～26、2005年

八木斉子 論文：「Multiple Monologues as a Narrative: From Beckett to McPherson」『Ireland on Stage: Beckett and After』(CARYSFORT PRESS)、PP.107～119、2007年

八木斉子 論文：「Collections, Press Conference, and Pinter」『英文学』93(早稲田大学英文学会)、PP.101～112、2007年

八木斉子 論文：「Pinter the Adapter: *The Proust Screenplay* in Notes and Drafts」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学 21世紀COEプログラム演劇の総合的研究と演劇学の確立)、PP.1～8、2007年

八木斉子 論文：「Putting Irish "Space" on the Stage」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学 21世紀COE演劇の総合的研究と演劇学の確立)、PP.13～19、2006年

八木斉子 論文：「パーセルによるセミ・オペラ作品：その定義と上演形態」『初期オペラの研究：総合舞台芸術への学際的アプローチ』(彩流社)、PP.175～193、2005年

澤田敬司 単行本：「現代演劇と文化の混淆：オーストラリア先住民演劇と日本の翻訳劇との出会い」(早稲田大学出版部)、PP.400、2006年

澤田敬司 論文：「ナショナルな歴史と記憶をめぐる」『シアターアーツ2006秋号』(晩成出版)、PP.90～99、2006年

澤田敬司 論文：「フランス語で書かれた「オーストラリア文学」 - ポール・ウェンツとその作品 (フランス語で書かれた「オーストラリア文学」 - ポール・ウェンツとその作品)」『オセアニア研究』17(オセアニア英語研究会)、PP.1～5、2006年

冬木ひろみ編著、大井邦雄、河合祥一郎、山本真司、篠崎実、清水徹郎、中野春夫、本橋哲也、大場建治、野上勝彦、浜名恵美 単行本：「ことばと文化のシェイクスピア」(早稲田大学出版部)、PP.320、2007年

冬木ひろみ 論文：「雛鳥(『妹背山婦女庭訓』—ジュリエットを鏡として)」『國文學』52巻1号(學燈社)、PP.122～125、2007年

冬木ひろみ 論文：「シェイクスピアの言語の世界から現代へ」『ヨーロッパ世界のことばと文化』(成文堂)、PP.129～144、2006年

冬木ひろみ 論文：「二つの オルフェーオ —モンテヴェルディとグルックのオペラにおける劇的手法をめぐる」『初期オペラの研究』(彩流社)、PP.29～48、2005年

冬木ひろみ 論文：「『リア王』—「無」という価値をめぐる」『文学のショーケース』(早稲田大学第二文学部)、PP.41～48、2004年

和田 修 論文：「対馬における芸能と村落」『海のクロスロード対馬』(21世紀COEプログラム研究集成アジア地域文化学叢書9、雄山閣)、PP.138～158、2007年

国際会議等の開催状況【公表】

（事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数（うち外国人参加者数）、主な招待講演者（3名程度））

2003年3月12～16日、早稲田大学、国際研究集会「演劇研究の現在」、400人(50人)、シャルル・ロビヤール（文化組織経営コンサルタント/パリ第9大学）、クリスティー・カーソン（ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校マルチメディアセンター）、王 安祈（清華大学）

2003年9月17日、早稲田大学、国際研究集会「現代中国における伝統演劇俳優の養成」、50人(10人)、杜鵬（中国戯曲学院表演系主任）

2003年10月20日、早稲田大学、国際研究集会「川劇の演技術と俳優訓練」、40人(10人)、張中学（中国四川巴蜀芸術学院院長）

2004年9月4日、早稲田大学、「舞台芸術と人材養成＜ディシプリン＞を再考する」、100人(30人)、クリストフ・トリオー（ボワチエ大学助教授）、フレデリック・フィスバック（演出家）、ジュゼッペ・モリノ（ダンサー・俳優）

2004年10月6日、プラハ・カレル大学、「New Trends in Chinese and Japanese Theatre Studies」、100人(80人)、古井戸秀夫（事業推進担当者）、平林宣和（事業推進担当者）、田草川みずき（COE特別研究生）

2004年10月30日、早稲田大学、「パフォーミング・アーツ・アーカイブの現在」、100人(20人)、ジャクリーン・デービス（ニューヨーク公共図書館舞台芸術図書館館長）

2004年11月4日、早稲田大学、「千田是也 - いま振り返る“新劇の巨人”」、200人(30人)、ベアーテ・ヴェーバー（フンボルト大学森鷗外記念館副館長）

2004年11月19日、早稲田大学、「アジアの舞台芸術について - 演劇を中心に」、150人(60人)、黎繼徳（「中国戯劇」副編集長）・呉泰錫（演出家・劇団木花代表）

2005年8月8日、早稲田大学、「聴覚障害とダンス～ブルガリアと日本の事例から～」、100人(20人)、レクサンドラ・ホン（国立演劇・映画アカデミー助教授。パントマイム科教員）、ペトヤ・ストイロバ（国立演劇・映画アカデミー助教授）

2005年8月18～19日、早稲田大学、「歌舞伎の海外公演の反響調査をめぐって」、50人(20人)、李応寿（韓国・世宗大学）、ローレンス・コミンズ（米国・ポートランド州立大学）、ポール・アトキンス（米国・ワシントン大学）

2005年10月1日、早稲田大学、「演劇・国家・政治 現代演劇の戦略」、80人(20人)、エマニュエル・ヴァロン（パリ第10大学教授）、ジャン・ジュルドゥイユ（パリ第10大学教授）、ハンス＝ティース・レーマン（フランクフルト大学教授）

2005年12月9～10日、早稲田大学、国際研究集会「演劇資料と演劇研究 - テキストと画像 - 」、200人(30人)、アンドリュ・ガーストル（ロンドン大学SOAS教授）、車文明（山西師範大学戯曲文物研究所所長）、邱坤良（国立台北芸術大学校長）

2006年1月21日、早稲田大学、国際研究集会「地域と劇場」、200人(20人)、ジェラリド・リッドストーン（ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ教授）

2006年6月20～21日、早稲田大学、「モンゴル演劇・映画の今—歴史と未来を見据えながら—」、500人(100人)、D. ツェドマー（モンゴル国立演劇博物館館長）、P. ツェレンダグワ（モンゴル国立ドラマ劇場所属俳優・モンゴル映画芸術大学教授・人民俳優）、J. ソロンゴ（モンゴル映画撮影所所長・モンゴル映画芸術大学学長・映画監督）

2006年9月29～10月1日、早稲田大学、国際サミュエル・ベケットシンポジウム東京2006「ボーダレスベケット」、500人(150人)、J. M. クッツェー（小説家）、メアリ・ブライデン（カーディフ大学教授）、イノック・ブレイター（ミシガン大学教授）

2006年11月9～11日、早稲田大学、「イブセン没後100年フェスティバル - 我々にとってのイブセン - 」、400人(50人)、エロール・デュルバック（カナダ・プリティッシュコロンビア大学教授）

2006年12月8～9日、早稲田大学、国際シンポジウム「散楽の国際性」、150人(30人)、シャファイ・ラマン（インド インディアン・エクスプレス新聞社文化政治担当主筆編集委員）、テッパ・ウィテド（モロッコ カディ・アヤード大学教授）、延保全（中国 山西師範大学戯曲文物研究所教授）

2007年2月3～4日、早稲田大学、「春柳社百年記念国際シンポジウム」、100人(40人)、袁国興（華南師範大学教授）、宋宝珍（中国芸術研究院話劇研究所副所長）、劉平（中国社会科学院文学研究所教授）

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

特別研究生の公募

平成14年度より毎年度ごとに、学内外に対して特別研究生を公募した。特別研究生とは、大学院博士後期課程もしくはポスドク生であること、演劇研究に志すことを条件とする、本拠点の研究生である。公募は毎年年度初めまでに行い、書類により厳正に審査して採用した。採用者には早稲田大学大学院博士後期課程学生と全く同じ待遇を与えた。初年度には35名が応募・採用されたが、以後、応募・採用者は、62名・70名・89名・86名と年々増加し、通算144名の学生を指導することになった。そのうち76名が他大学大学院の出身者である。海外からの応募・採用者も14カ国26名にのぼった。これら特別研究生は、事業推進担当者が主宰する複数のプロジェクトに参加し、研究の実際に携わることにより、研鑽を積んだ。その成果は毎年発行される拠点の研究紀要に投稿論文として結実した。学外委員を含む査読委員会で審査の結果、全9号の紀要に総計113本の査読論文が掲載された。なお査読論文以外にも、研究報告や資料紹介の形で多数の投稿があり、採用されてもいる。特別研究生の専門分野は、事業推進担当者の数にほぼ比例しており、西洋演劇研究を志す特別研究生が最大であり、古典演劇研究分野の特別研究生がそれに続いた。東洋演劇研究や芸術文化環境研究コースの特別研究生は、全国的な研究動向を反映して少数にとどまり、アーカイブ構築研究においては映画研究を志す学生が中心とならざるを得なかった。

客員研究助手の雇用

公募により客員研究助手を13名雇用した。客員研究助手応募者は特別研究生を兼ねており、実質的に特別研究生の中から選抜する形となった。人事委員会での業績審査と面接を経て、特別研究生のうちからとくに優秀な者が選抜され、研究生ではなくスタッフとして研究事業に参画してもらうことになった。

客員研究助手の海外派遣

客員研究助手には原則として半年間の海外研修を奨励し、家庭の事情等で渡航がむづかしいため、短期出張に切り替えた者を除き、8名の助手がオハイオ州立大学・コーネル大学・コロンビア大学・ロンドン大学・ベルリン自由大学・サンクトペテルブルグ大学等に、研究員の資格で半年間派遣され、研修を行った。派遣年度は平成15年度～18年度のほぼ毎年度にわたる。

若手客員講師（非常勤）の雇用

平成18年度に特別研究生のうち、単位満了で学籍を離れた優秀な3名を選んで客員講師（非常勤）に雇用し、COE特別講座を担当させた。それぞれ、日本演劇・中国演劇・ヨーロッパ演劇に関する集中講義を行い、特別研究生が登録して聴講した。

RA・TAの雇用

毎年多数のRA・TAを雇用し、事業推進担当者や研究協力者の授業補助や、研究事業への補助に従事してもらった。

特別研究生個人研究プロジェクト

平成15年度より、特別研究生若干名に対して、夏期休暇期間を含む数ヶ月の短期研究プロジェクトを公募し、申請書類を審査・面接の上、通算7件のプロジェクトを採択し、当該学生の所属する研究コース予算中より、研究遂行上必要な予算の使用権を認めて執行させ、その成果を紀要に投稿することを義務付け、査読の上、7件すべてを採用した。

博士論文成果報告会

学位論文を提出した特別研究生のうちとくにすぐれた論文を提出した者や、論文博士として文学研究科演劇・映像専攻に学位論文を提出した研究者を招聘し、平成15年度より、平均年2回ずつ、通算8回の博士論文成果報告会を行った。各回2本ずつ、各1時間の講演を依頼し、海外や遠距離の発表者に対しては招聘旅費を支給し、また講演謝礼を支払うことを原則とした。この成果報告会を通じて、特別研究生に対して、目指すべき目標を示すことが出来た。

若手研究者の起用

平成17年度に、芸術文化環境研究コースの客員講師（専任扱い）を公募し、若手研究者1名を2年の任期付で雇用した。コースの研究、活動運営の中心的存在として活躍した。

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は十分達成され、期待以上の成果があった

(コメント)

演劇博物館を基礎に、世界的視野に立った演劇学を確立し、世界に発信する演劇の研究教育の拠点を形成しようとする今回のプログラムは、所期の目的を十分に達成したと評価できる。具体的には①アーカイブ構築の分野においては50万件の資料をデジタル化し、年間300万件に上るアクセス数に達するデータベース構築を行い、②古典演劇研究の分野においては、古典演劇の復元上演を中心として、新資料の発見を含む多方面にわたる活動成果を上げた。また、③演劇理論においても、フランス古典、現代演劇を中心として充実した成果を示した。特に西欧の演劇と中国の演劇、日本の演劇の三者を比較しつつ、理解を深めようとする研究方向は世界的水準を追究する上で、今後も期待できる。

人材育成面については、他大学の院生76名を含む144名の若手研究者を受け入れ、また、外国人留学生26名を特別研究生として受け入れるなど広く門戸を開放し、13名を客員研究助手として雇用、8名を海外研修に派遣、7名の個人研究プロジェクトに予算的支援を行い、あわせて原語によるゼミを実施するなど、きめ細かい研究指導を実施し、目標の50名には達しなかったものの、通算16名の博士号取得者を出し、あわせて高等研究教育機関への専任としての就職決定者が13名を数えるに至ったことを、高く評価する。

ただし、④芸術文化環境学の分野においては残された課題も多いので実現した研究水準を維持・発展させるためには、更なる創意・工夫が求められる。特に若手研究者の養成への一層の努力と、成果の国内外への発信の強化が必要である。